財務省の「令和元年度たばこ小売販売業調査」結果から

財務省は6月8日、「令和元年度（2019年度）たばこ小売販売業調査」結果を公表した。その概要は、加熱式たばこの取り扱い店率は約6割、店舗経営者の高齢化、たばこの年間売上高の二極化など、たばこ小売業の経営実態を浮き彫りにしている。数字は推計値。

本調査は、5年毎（前回は平成25年度）に実施しているが、平成28年度（2016年度）には1回限りの調査として「たばこ関連産業の実態等に関する調査」を行っている。財務省がまとめた今回の調査結果の概要は（推計値・※）以下の通りだが、前回（平成28年度）調査結果とも比較してみた（%は全体に占める割合である）。

【営業形態（業種）区分】＝「コンビニエンスストア」（コンビニ）が26・7%、「酒類販売業」が13・9%、「たばこ専業店」（主にたばこ販売を行う店舗）12・7%。3業種あわせて53・3%と、全体の半数強を占める。前回調査の3業種あわせて55・1%と比較するとやや減少しており、その内訳をみると「コンビニ」が6.1ポイント増と店数を伸ばしている反面、「たばこ専業店」が6.2ポイント減、「酒類販売業」が1.7ポイントの減と、「コンビニ」の増加が顕著である。

【たばこ自販機の有無】「有り」が45・1%、「無し」が54・9%と、半数以上のお店が自販機を有していない。前回調査では「有り」が62・2%であったのに対し、17・1ポイントの大幅減となり、市場から自販機が少なくなっている。

【加熱式たばこの取り扱い】＝今回、初めて実施された調査。加熱式たばこを「取り扱っている」は58・1%と約6割。現在「取り扱っていない」は41・9%だが、そのうち62・9%が「今後も取り扱う予定はない」、32・6%が「わからない」と回答している。加熱式たばこの需要が高まる中で、今後が注目される。

【店舗経営者の年齢】＝最も多いのが「60歳～69歳」の26・0%、次いで「70歳～79歳」の25・9%で、2区分あわせて51・9%を占める。前回調査では「60歳～69歳」が29・3%、「70歳～79歳」が26・7%で、と

【たばこの年間売上高】＝「1201万円以上」が29・5%と約3割を占める反面、「1000万円以下」の24・7%と「1001～2000万円」の14・0%をあわせると38・7%となる。前回調査は、「1200万円以上」が27・9%であったのに対し、「1000万円未満」の16・5%と「1000～2000万円未満」14・8%をあわせると31・3%となっており、年間売上高の二極化は続いている。

◇　◇　◇

※この概要の数字（まとめ）は、回収された調査票を「昭和60年4月1日許可（たばこ事業法附則第10条）」と「昭和60年4月2日以降許可（たばこ事業法第22条）」別に集計し、母集団に復元した推計値としている。参考として、単純計算の調査結果（上表は一部）も公表しているが、前記のまとめの数字とは若干異なる。

〈たばこ小売販売業調査概要〉
◆**目的**：たばこ小売販売業者の店舗経営及び営業形態に関する状況等を把握して、たばこ行政を適切に行うための基礎資料とする。
◆**対象**：沖縄県を除く全国のたばこ小売販売業者の中から無作為抽出により、合計4500店を対象に実施し、2575店から回答を得た（回収率57・2%）。
◆**時期**：令和2年1月～2月。

経営者の高齢化・年間売上高の二極化
加熱式たばこの取り扱い店は約6割

【単純集計によるたばこの年間売上高の区分】

売上高	店数（店）	割合（%）
～100万円	739	28.9
101万円～200万円	420	16.4
201万円～300万円	222	8.7
301万円～400万円	149	5.8
401万円～500万円	97	3.8
501万円～600万円	72	2.8
601万円～700万円	82	3.2
701万円～800万円	53	2.1
801万円～900万円	33	1.3
901万円～1,000万円	47	1.8
1,001万～1,100万円	46	1.8
1,101万円～1,200万円	32	1.3
1,201万円以上	568	22.2
無回答	15	—
合　計	2,575	100.0

※「割合（%）」は「無回答を除く全体に占める割合」

新・煙・政・知・新

たばこと塩の博物館・谷田　有史

政府からの新型コロナウイルス感染症予防のための外出自粛により、自宅で多くの時間を過ごす〝巣ごもり〟状態になったことで、暇つぶしに往年の懐かしい映画を観る機会が増えた。とくに西部劇ものが好きなので、いろいろ鑑賞していたが、映画の中で喫煙シーン等が登場すると、思わずその場面に集中してしまう癖は抜けない。

たとえば、ハワード・ホークス監督の「リオ・ブラボー」（1959年）で、アル中に落ちぶれた元保安官助手のデュード（ディーン・マーティン）が酒場に酒をねだりに行くシーン。金が無いけれど飲まずにいられないディーン・マーティンが、カウンターで飲んでいた男に酒代を恵んでくれと頼む。すると男はワザと1ドル銀貨を痰壺に投げ入れ、拾えとせせら笑う。軽蔑と嘲笑の中でディーン・マーティンが痰壺に手を伸ばした瞬間、その

たばこ雑学講座㉖
西部劇に登場するたばこ

目の前で痰壺が蹴り飛ばされる。はっと見上げるディーン・マーティン。仁王立ちして親友を睨む保安官チャンス（ジョン・ウェイン）。

ディーン・マーティンのアル中克服とジョン・ウェインの友情がサブテーマとなっているこの映画において、最初に観客を誘う場面だが、この時に使用された〈痰壺＝Spittoon〉が何のために置かれているのかを知る人は少ないのではないか。

初めて同映画を観た時、この痰壺が何の目的で酒場に置かれているのか私も分からなかったが、たばこと塩の博物館で働くようになってから「噛みたばこ」のために用意されていることを知った次第である。

噛みたばこは、直接たばこの葉を含む混合物を噛む（実際は、噛むというより歯と歯茎の間に含む）ことにより風味を楽しむもので、たばこの摂取方法としては、「喫煙」や「嗅ぎたばこ」と並んで古くから行われていて、北米先住民はライムの葉とともに用いたといわれている。

噛みたばこを用いたことで中に滲み出た唾液は飲み込まず排出するが、この時に唾を吐き捨てるのが、西部劇に登場する痰壺だったのである。

アメリカにおいては20世紀中においても広く嗜まれた噛みたばこであったが、公共の場で唾を吐くと言う行為に対して、マナー的に好ましくないとされたため、近年では都市部においては見かけなくなった。しかし、愛用する人は今もいて、アメリカのタブロイド誌『NATIONAL ENQUIRER』（2011年8月15日号）によると、女優のサンドラ・ブロックが噛みたばこに病みつきだとの記事が掲載されている。

「百害あって一利なし」言説の背景⑩

武田　良夫

Q　男性の喫煙者率が8割を超えた昭和の時代、日本は元気で活力がありました。その間、寿命も延びて健康寿命世界一になりました。そうした事実を踏まえると、たばこは〈影（害）〉だけでなく〈光（効用）〉もあると思うのですが、どうして疫学にはそういう研究がないのですか。

A　林知己夫先生は「疫学は悪いものを見つけるために発達した学問だから、良いものを見つけるというのは出来ないのです。疫学の出発点はどう見ても細菌学です。細菌を見つけてそれを叩く。そういう学問の形態をとっているから悪いものは見つけられても良いものは見つけられない。良いものは沢山のバランス・ポイントやいろいろな条件があるから、二分法ではダメだということです」と述べています（「科学でわかること　わからないこと」／1987年／プレジデント社）。

Q　良いものは二分法がダメというのは？

A　科学（疫学）は「原因―結果の法則（因果律）」の定立を目的とし、再現性（誰がやっても同じ結果が得られる）が求められます。そのために、例えば、肺がんの罹患者か否か、喫煙者か否かのように対象を二分法で区分すれば〈定量化（測定・数値化）〉が可能でデータは客観的です。その結果、再現性が担保されるので、〈エビデンス（科学的証拠）〉とされます。

〈因果仮説〉は脳の錯覚!?　5
大事なのは〝健全な懐疑心〟

一方、「脳が異常に発達した」「社会的動物である」人間にとっての喫煙の効用はほとんどが心理・社会的なものです（**別表**）。例えば、表にある「ホッとする」は人によって認識の内容やレベルはさまざまで（主観性）、その上、体調や気分、周囲の状況によっても変わります（状況依存性）。林先生が言うように沢山のバランス・ポイントや条件があるわけで、〈定量化〉を可能とする客観的な二分法の記述ができません。その結果、「科学的に証明できない↓喫煙者の思い込みに過ぎない」と片付けられてしまうのです。

〈喫煙の効用〉

ストレス対処行動		項　目
身体反応変容	リラックス効果	1. ホッとした気分になる 2. リラックスできる 3. 気分転換になる
	覚醒効果	4. 集中力が弱まったとき、再び集中できる 5. 一服したら頭の回転が速くなる 6. 疲れた神経を活性化できる 7. 頭がシャキッとする
環境条件変容	まぎらわせ効果	8. 手持ちぶさたでなくなる 9. 口寂しさがまぎれる 10. 不安がまぎれる 11. 憂鬱な気分がまぎれる
	自己表現効果	12. 吸っている銘柄でその人の好みが分かる 13. 吸っている銘柄にはその人のセンスが表れる 14. 自分がたばこを吸っている姿がカッコいい 15. たばこはおとならしさをイメージさせる
	対人効果	16. 人と話をするキッカケとなる 17. その場の雰囲気を和らげる 18. 人と話している時に間が取れる 19. 人と話している時にたばこを吸うことで考える時間が得られる

〈（財）たばこ総合研究センター〉

Q　つまり、〈喫煙の効用〉で記述されているような〝人文知〟は、理系の〝法則知〟の世界に馴染まないから「無い」とされている、ということですね。

A　そうです。しかし、今や科学信仰の時代、医師や研究者は口を開けば〝エビデンス（科学的証拠）〟と言います。こうした科学一辺倒の風潮に対し、本欄ではこれまでも哲学者や科学哲学者の批判を取り上げてきましたが、今月は内田麻理香・東大特任講師（科学技術社会論）の「科学は常に絶対とはいえない」を引用しましょう。

「科学が必ず答えを出してくれると一般の人は思っている。教育に問題があるのかもしれない。科学で問うことができても科学で答えられない領域があり、こうした問題にすら科学で解決しようとする風潮は危うい。科学で得られた知見や技術は現代社会が頼らざるを得ない非常に強力なものだが、有効範囲は狭い。科学は得意分野が限られることを知る〈科学リテラシー〉が大事だ。

理系の大学生でも科学論を学ぶ人は少ない。だから、研究者や科学者の中にも、科学がいつでも直ちに正確な答えを与えてくれるという〝固い科学観〟を持つ人が出てくる。科学に限界が伴うことを自覚し、健全な懐疑心を持ち続けるのが重要だ」（2019・11・1／日経新聞）。

権威ある大学や研究機関（理系）の発表だからと鵜呑みにせず、私たち自身が健全な懐疑心を持ち、〈リテラシー（読み解く力）〉を高めることが肝要ということでしょう。その一助にと本欄を続けていますが、いささかでも参考になれば幸いです。

内容が難しすぎるという感想も頂きますが、「リテラシーを高めるために必要なレベル」と思いますのでご容赦下さい。